

「大場先生ご定年に際して——贈る言葉」

榎 本 誠

大場先生のご定年に際し、何か思い出を書くようにと
のことなので、長年お世話になった後輩同僚として、私
の個人的な思い出を綴ることでご勘弁頂きたい。

大場恒明先生との出会いは、今から約十七年前に遡る。
神奈川大学の平塚キャンパス開設準備として開設二年程
前に、就任予定の外国語・一般教育担当教員への説明
会・懇親会が確か横浜駅西口の東急ホテルで行われ、こ
の時に大場先生ははじめすでに退職された加藤二郎先生に
も初めてお目にかかった。その当時は何を話したのかは
定かではないが、エネルギーシユなお方という印象は今
でも鮮明に残っている。

平成元年四月初めに新キャンパス竣工式が行われ、そ
のレセプションの場では親しくお話をさせて頂き、新た
な学部での教育に意欲を燃やしておられたと記憶してい
る。前任校の日本女子大に長らくお勤めであったと伺っ
たが、いきなり右手の小指を立てて、「これでクビになっ
たの」と笑いながらおっしゃったのにはびっくりさせら
れた。詳しくその内容をここに披瀝する訳にはいかない

が、何事も明るく笑い飛ばされる豪快さは今でもお変わ
りがない。そのパーティーでのスナップ写真が今手元に
あるが、私も含めてこの十五年間の風雪の厳しさが分か
るような風貌の変化を実感せざるを得ない。皆確実に若
かった。

研究室もお近くで、同じく外国語分野ということもあ
り、その後何かにつけて先生の研究室に立ち寄り、四方
山話から始まってかなり深刻なご相談に至るまで、コー
ヒーを（たまにはアルコール飲料を）頂きながら話し込
んだものであった。川越のご自宅のご家族と離れての単
身赴任のせいも、夜遅くまで話し込んで、真つ暗に
なったキャンパスの駐車場まで一緒にして、「ま、とにかく
頑張ろうや！」というよく分からない結論でおわかれ
したので思い出す。特に外国語グループとしては当時北
澤先生（英語）、加藤二郎先生（ドイツ語）、野間先生
（スペイン語）などの錚々たる長老（失礼）がおられ、
私のような若輩者との繋ぎ役的な役割を自然と大場先生
が果たされるような具合であった。私たちの勝手な構想

を楽しそうに聞いて下さり、折を見て長老方に必要な情報伝えて下さっていたようである。ともすれば個人主義に陥りがちな大学のような組織においては、肝胆相照らすかのような人間関係は日常的に必要なものである。従つてこのような潤滑油的な働きは極めて重要な役割であり、大場先生はご存じの通り人情味に溢れ、責任感強く、情熱的なお方であるが故に、果たされた役割も大きかったと実感している。

ご専門分野については言うまでもなく、アンドレ・ジッド研究をベースに日本文学との比較文学研究に長年従事され、精通されておられ、十八世紀のイギリス小説を専門分野としていた私にはとても近しく感じられ、先生の研究室の蔵書の中には私にも馴染みの比較文学関係の書籍も散見されて、余計に距離を感じなくなっていたのかもしれない。また、先生の好奇心は文学に止まらず、古今東西の映画にも及んでいることは、一度お伺いした鶴巻温泉の先生の庵に山ほど積まれた映画のビデオの本数からも十分理解できた。

庵といえば聞こえがよいが（失礼）、ご本人も「あばら屋だよ」と仰つておられたが、隠れ家と言えば、先生は以前からセントバーナード犬を広大な敷地のなかで飼うことを夢見ておられた。ブラックバス釣りに没頭され、ワゴン車に寝泊まりしながらよく河口湖へ通われていた

し、ボートからの釣りを可能にするために船舶免許まで取得されたほどの熱意をお持ちであった。いずれにせよ、都会のような人工的な環境は、夜のネオン街以外は唾棄すべきものであり、荒々しい素朴な自然の中で活動することを好まれていた。

先生のこのような個人的、私的な事柄をお許しも得ずに暴露して良いものかと内心不安になるが、これも先生への感謝の表れとして、笑つて許して頂けるであろう。調子に乗つたついでにさらに暴露すれば、こうした先生の個人的な世界を知り得たのは、先生の研究室や平塚の飲み屋やカラオケバーで、泥酔寸前の極地の中、怒鳴り合うようにお互いの肩を叩きながら話し込んだ際の記憶である。酒と言えば、大場先生の武勇伝は数々聞かされていたが、ご想像通りどれも酒に酔つたうえでのものがあり、恐らくご本人はよく覚えておられないのではないかと察せられる。しかし、その失敗談を語られる時の先生のご様子はとても楽しそうで、笑いが止まらないといった風に、他人事のように笑い飛ばしながら語られるので、聞かされる方も内容はどうであれ楽しく一緒に笑わせて頂けるのであった。具体的にはとてもここに記す訳にはいかないが、（文字にするとんでもない行状と誤解されかねないからであるが）実際には実害のない失敗談であった。

先生があこがれておられたのは、起承転結のはつきりとした明快な、予測可能な人生ではなく、まさしく口癖のように言われていた「逸脱」の人生であつた。逸脱の美学とでも言うのであろうか、ご自分でも自分の人生は「逸脱の人生なんだ」と語られていた。しかし、定年まで職責を全うされ、教育者として、研究者としての責任を果たされたことは、「逸脱」とは対極の人生であらう。但し、例によって大場先生の個人的、私的な、情念の世界では大いに逸脱が行われたのかもしれないが、私には定かではない。ともあれ、ご苦勞様の言葉と同時に、「感謝」の二文字を何度差し上げても足りないくらいであることは確かである。大場先生、ありがとうございました。

Bon voyage!